キリストの光　光のキリスト

年間第33主日　11月16日（聖書週間〈23日まで〉）

（マタイ25・14—30　または25・14−15、19−21）

土曜日の夜。ミサの前に夕食を始めようとしたその時、玄関のチャイムが鳴った。出て見ると母と娘が立っていた。

初めての人だった。遠く離れて生活している娘が教会に行きたいから、その地の教会の場所を教えてほしいという。

どこの信者ですか、と尋ねると、この教会に所属しているという。母親は名を名乗った。聞き覚えのある名前だった。「よく来られました！」。飛び上がらんばかりに、うれしかった。ずっと連絡が取れなかったから。

理由があって長い間教会には来ていないという。行きたい、行かなければいけないと思いながらも、なかなか足が向かない。

泣きわめいているかも？

理由を聞くと、離婚しているから、と言う。祈りはしているのですが、教会へは行けない、と寂しそうに言った。

いいんですよ。どうぞ、どうぞ来てください。教会はあなたのような方のためにあるのです。母親も娘も驚いたような表情をしながらも、その顔は喜んでいた。

この教会の皆さんは誰もあなたをとがめないし、後ろ指を指したりはしません。あなたが来れば、みんな喜びますよ、と言った。わたしもうれしかった。喜びのあまり、連絡先も聞かずに、娘さんの転出手続きもせずに別れた。また来られるのを待ってますよ、来る気持ちになったらいつでも来てください、

と言いながら。

うれしかった。相手が女性でなければ抱きしめて喜んだだろう。

二つのことがうれしかった。

この教会に七年間いて、初めての人に出会ったこと。その方に「あなたが来れば、この教会の皆さんは喜びますよ」と言えたこと。

翌日、ミサに来られるかと少し期待していたが、来られなかった。べつに寂しくはなかった。いつか「時」があると思った。近いうちに来られると思った。「近いうちに」来られなくてもいい、とも思った。すべてに「時」がある…。

タラントンのたとえ。

わたしたちは「神の財産」を預かっている。量や額は関係ない。神からいただいた「財産」は「神のこころ」、「神の想い」、「神の愛」。その財産を使えば、神と一緒に喜ぶことができる。

一タラントンを預かった者はそれを使わなかった。彼は主人を厳しい方だと思い違いをしていた。だから「神の財産」を使うことができなかった。だから、神と一緒に喜ぶことができなかった。神がせっかく財産を預けたのに、それを役立てることができなかった。だから「暗闇」に入る。

このお母さんをしかって追い返していたら、わたしは今ごろ泣きわめいて歯ぎしりしていると思う。

（山元貢＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）

今週の福音

17日・月 ルカ 18・35—43
18日・火 ルカ 19・1—10
19日・水 ルカ 19・11—28
20日・木 ルカ 19・41—44
21日・金 ルカ 19・45—48
22日・土 ルカ 20・27—40